

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：32693

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21592785

研究課題名（和文）生活者の視点で関わる看護実践モデルの開発と適用

研究課題名（英文）Development and application of the 'nursing practice model employing the perspective of living individuals'

研究代表者

下村 裕子（SHIMOMURA HIROKO）

日本赤十字看護大学・看護学部・講師

研究者番号：20216138

研究成果の概要（和文）：「看護の教育的関わりモデル ver.6.4」を構成する概念の1つ「生活者としての事実とその意味のわかち合い」の定義を、「生活者である対象者が、病気や生活の出来事をどのように捉え、感じているかを、看護職者が対象者との関わりを通して見だし、理解するとともに、対象者に話したり、伝えたり、確認しあったりするプロセスのこと」と修正した。さらにこの概念をモデル化し「生活者の視点で関わる看護実践モデル」を作成した。

研究成果の概要（英文）：Definition of 'Understanding the person's life and sharing with him/her', one of the concepts that consist of 'Nursing model on education, ver. 6.4', was revised as follows: "The process during which a nurse, through interacting with the person, comes to understand how the person, not as a patient but as a living individual, perceives and feels about his/her own illness and life events; speaks to the person, sharing and confirming each other his/her own and the person's understanding." In addition, we created a 'nursing practice model employing the perspective of living individuals' based on this concept.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：生活者、看護実践、モデル開発

1. 研究開始当初の背景

1985年の日本看護科学学会において、「生活」という用語は、看護ケアを浮き彫りにさせるものであり、看護における「生活の概念」

の明確化が必要である（林、1985）と考えられ、「看護実践にみる生活の概念」、「看護教育における生活概念の展開」という2つのシンポジウムが開催された。この翌年から看護

学術用語検討がはじまり、1995年に10年間の活動報告として35の看護学核的用語が発表された(薄井ら, 1995)。その中で「生活」と「日常生活行動」が定義されている。しかし1985年以降、「生活」という言葉を用いた文献は数多くあるが、そのほとんどがあたりまえの用語として「生活」を用いており、「生活」および「生活者」という言葉は看護の独自性を示す、ひとつの重要な「かぎ」となっているにもかかわらず、看護の立場から本格的な検討は行われてこなかった(小板橋, 1980; 岩井, 1985; 近藤, 1997; 河口, 2001a)。

1994年から患者教育研究会(代表: 河口てる子)では「看護の教育的関わりモデル」の検討において多くの実践事例を検討してきた。その中で患者が行動変容にいたったケースは、いずれも看護職者が患者の生活習慣や価値観(患者が大切にしていること)に配慮し、それに基づいて療養生活を支援していたことが明らかになった。

そこで「看護の教育的関わりモデル」に「生活者としての事実とその意味のわかち合い」という概念を位置づけ、看護として「生活」および「生活者」をどのように捉えるのか、「看護が生活者の視点でかかわる」ということがどういうことなのか、などについて検討を重ねてきた(河口, 2001b; 河口, 2005; 下村ら, 2003; 下村ら, 2005; 下村, 2006a; 下村ら, 2006b)。

その中で「生活」および「生活者」について定義し、「生活そのものの事実」と「その人にとっての意味」とは何か、「わかち合い」とは何であるかを検討した結果、「生活者の視点で関わる看護実践モデル」(図1)が試案された。

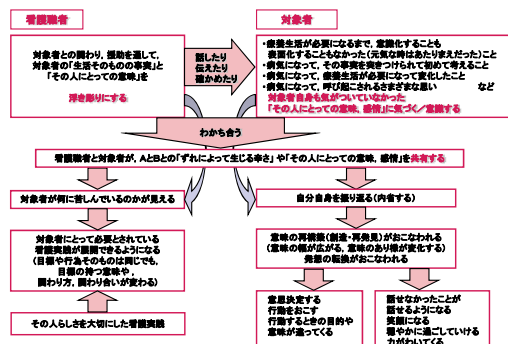


図1 生活者の視点で関わる看護実践モデル (案)

この「生活者の視点で関わる看護実践モデル(案)」は、「患者教育のための看護実践モデルを用いた実践的教育プログラム開発とその介入研究」(基盤研究A、平成17年度～平成20年度、研究代表者: 河口てる子)にける実践研究の中で、「看護の教育的関わりモデル」を学習し、事例検討を行うと必ず重要な意味をもっており、検討会に参加した看護師たちは、対象者との日々の関わりに意味

を見出し、個別性を大切にした看護へと発展させている。しかし、日々の看護師と対象者間での関わりあいの中にどのような現象がおき、看護師と対象者との相互作用による「わかち合い」とはどのようなもので、そこから看護師と対象者はどのように発展していくのか、ということについての説明が十分にできていない。

そこで、本研究では「生活者の視点で関わる看護実践モデル」を作成し、このモデルを看護実践に適用することで、看護が生活者の視点で関わることの意義や成果を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

現在の試案モデルを実践事例に適用させながら、モデルおよび構成要素を精製し、「生活者の視点で関わる看護実践モデル」を作成する。そして「生活者の視点で関わる看護実践モデル」を看護実践に適用することで、看護が生活者の視点で関わることの意義や成果を明らかにする。

3. 研究の方法

「生活者の視点で関わる看護実践モデル」(案)について、全国3か所の協力施設での実践研究での反応や、研究協力者の実践事例に適用させながら、モデルの構造や構成要素を検討し、「生活者の視点で関わる看護実践モデル」を作成する。その後このモデルを活用した事例検討会を研究協力施設で開催し、看護師の変化を明らかにする。

4. 研究成果

(1)平成21年度

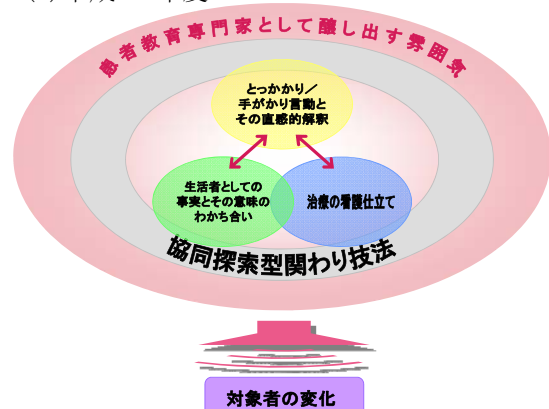


図2 看護の教育的関わりモデル Version 6.4

「生活者の視点で関わる看護実践モデル」(案)を含む「看護の教育的関わりモデル」(図2)を用いた実践研究において、研究参加者たちは、「生活者の視点で関わる看護実践モデル」(案)を知ることにより、まず、対象者との何気ない日々の関わりの中に、対象者にとってかけがえのない価値観や個別

の生き方を見いだし、対象者への関心や理解が深まるようになった。次第に、診療の補助業務以外で、それまで意識していなかった対象者との日々の関わりを、看護の一部として意識するように変化した。1年近い実践研究の中で、研究参加者の一人は、心内膜炎で入院した70歳代の男性が、なかなか療養に専念できない様子に疑問を感じ、男性の日々の生活を丁寧に聞いていった。するとこの男性はキウイ農家を営んでおり、キウイは収穫の時期がすごく大事で気が気ではないこと、自分が指示することができれば収穫ができるため、何とかその時期までに退院しなければと焦っていたことがわかった。研究参加者は医師と男性の希望する時期までに治療計画が進むように調整し、男性は療養に向き合い、予定通りに退院することができた。

研究参加者はポストインタビューで、モデルを活用・意識することで、対象者との関わりあいを通して見えてきた、対象者にとっての生活の意味を、看護の実践に活かせるようになってきていることを実感していた。またそれまでは看護実践の成果として捉えられていなかった対象者の変化を評価できるようになりつつあることを語っていた。

(2) 平成 22 年度

平成 21 年度までに行った「生活者の視点で関わる看護実践モデル」(案)を含む「看護の教育的関わりモデル」を用いた実践研究の結果を分析し、モデルの構造や構成要素、概念を再検討した。

研究参加者たちは、対象者との何気ない日々の関わりの中に、対象者にとってかけがえのない価値観や個別の生き方を見いだし、対象者への関心や理解が深まるようになる。そして、それまでは意識していなかった対象者との日々の関わりを、看護の一部として意識するように変化していた。このように、看護師が「理解」し、「意識化」すると、看護師の行動(支援)が変わることが明らかになった。しかし、このことだけでは「生活者としての事実とその意味のわかち合い」とはいえず、看護師は、対象者との関わりを通して、対象者が病気や生活の出来事をどのように捉え感じているかを、見出したり、理解したりしているが、必ずしも対象者に「話したり、伝えたり、共に確認しあったりして、共有すること」はしていない。

看護師は、対象者についての理解が深まることで「わかった!」と「腑に落ちる」ことがあり、看護師の解釈が変わることにより、看護師の態度と行動が変わる。一方対象者は、この看護師の態度・行動の変化により「わかってもらえた感」が生まれ、対象者自身の行動が変わることもある。看護師と対象者が理解したり、気づいたりしたこと、あるいは「わ

かった感」「わかってもらえた感」の「わかった事実や意味」が違うこともあるが、それは当然のことであり、「わかち合い」に「共に確認したり、共有すること」はいらぬのではないかと、などの検討を行った。

(3) 平成 23 年度

平成 21 年度から平成 22 年度までに検討してきたことをもとに、「生活者の視点で関わる看護実践モデル」の親モデルである「看護の教育的関わりモデル」を構成する概念の1つ「生活者としての事実とその意味のわかち合い」の定義を、「生活者である対象者が、病気や生活の出来事をどのように捉え、感じているかを、看護職者が対象者との関わりを通して見だし、理解するとともに、対象者に話したり、伝えたり、確認しあったりするプロセスのこと」に修正した。

そして、これまでの検討の結果から、「生活者の視点で関わる看護実践モデル」を精選した(図3)。

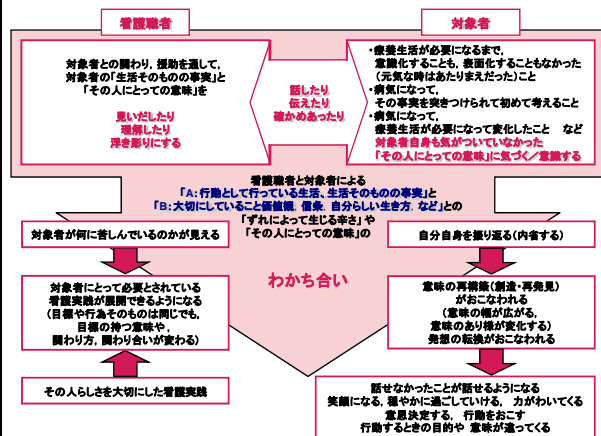


図3 生活者の視点で関わる看護実践モデル

このモデルは、次のサブモデル(図4、図5)を含み次のように説明できる。

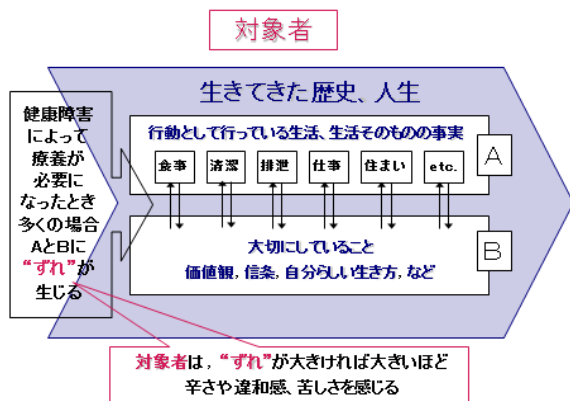


図4 「生活そのものの事実」と「その人にとっての意味」

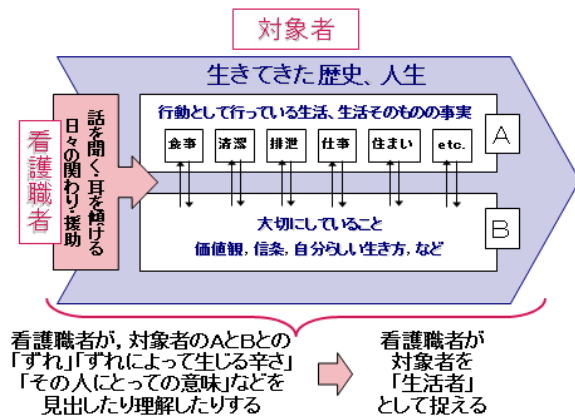


図 5 看護職者が対象者を「生活者」として捉える

看護職者は、対象者との日々の関わりあいを通して、対象者にとってかけがえのない価値観、個別の生き方、対象者にとっての生活の意味が見えてくるようになり、対象者についての理解が深まることで「わかった！」と「腑に落ちる」ことがある。そして、看護職者の解釈が変わることにより、看護職者の態度と行動が変わる。対象者は、この看護職者の態度・行動の変化により「わかってもらった感」が生まれ、対象者自身の心もちや行動の変化へと繋がっていく。

本研究により、看護職者が「生活者の視点で関わる」こと（この関わりを看護実践として意識化すること）により、対象者に対する理解が深まり、そのプロセスそのものが、対象者自身の「心もちや行動の変化」という成果に繋がっていくという示唆を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

- ① 下村裕子、林優子、他 21 名、生活者としての理解—生活者としての事実とその意味のわかれ合い、Nursing Today、査読無、第 26 巻 6 号、2011、23-28
- ② 河口てる子、他 22 名、患者教育の新しい風—看護の教育的関わりモデル Ver.6.4 とは、Nursing Today、査読無、第 26 巻 6 号、2011、12-18
- ③ 伊藤ひろみ、他 22 名、患者が出しているサインを捉える—とっかかり／手がかり言動とその直感的解釈、Nursing Today、査読無、第 26 巻 6 号、2011、19-22
- ④ 小田和美、他 22 名、意思・病状・認知・生活に合わせた治療・療養法のアレンジをする—治療の看護仕立て、Nursing Today、査読無、第 26 巻 6 号、2011、29-33
- ⑤ 恩弊宏美、他 22 名、行動変容を支える—協同探索型関わり技法、Nursing Today、査読無、第 26 巻 6 号、2011、34-38
- ⑥ 長谷川直人、他 22 名、行動変容のプロモーター—患者教育専門家として醸し出す雰囲気

(PLC : Professional Learning Climate)、Nursing Today、査読無、第 26 巻 6 号、2011、39-43

- ⑦ 大澤栄美、他 22 名、看護の教育的関わりモデルで看護師はどう変わるのか、Nursing Today、査読無、第 26 巻 6 号、2011、44-50 [学会発表] (計 6 件)

① Teruko Kawaguchi, Action Research Using the Nursing Model on Education (TK Model): Outline of the Model version 6.3 and the Usefulness in Three Action Research Implementations, The 2nd International Nursing Research Conference of WANS, 2011 年 7 月 14 日-15 日, Mexico

② Emi Yamada, Action Research Using the TK Model: Study Meetings and the Study of Nursing Practice Facilitated by a Staff Nurse (Certified Nurse Specialist), The 2nd International Nursing Research Conference of WANS, 2011 年 7 月 14 日-15 日, Mexico

③ 河口てる子、「看護の教育的関わりモデル」を用いたアクションリサーチ：モデル Ver. 6.1 の概要、第 29 回日本看護科学学会学術集会、2009 年 11 月 28 日、千葉県

④ 山田栄実、「看護の教育的関わりモデル」を用いたアクションリサーチ：病棟看護師主導のアクションによる看護師の変化、第 29 回日本看護科学学会学術集会、2009 年 11 月 28 日、千葉県

⑤ 東めぐみ、「看護の教育的関わりモデル」を用いたアクションリサーチ：院内教育担当者のアクションによる看護師の変化、第 29 回日本看護科学学会学術集会、2009 年 11 月 28 日、千葉県

⑥ 大池美也子、「看護の教育的関わりモデル」を用いたアクションリサーチ：大学研究者からのアクションによる看護師の変化、第 29 回日本看護科学学会学術集会、2009 年 11 月 28 日、千葉県

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下村 裕子 (SHIMOMURA HIROKO)
日本赤十字看護大学・看護学部・講師
研究者番号：20216138

(2) 研究分担者

河口 てる子 (KAWAGUCHI TERUKO)
日本赤十字北海道看護大学・看護学部
・教授
研究者番号：50247300

(3) 連携研究者

林 優子 (HAYASHI YUKO)
大阪医科大学・看護学部
研究者番号：50284120